

〇〇してみました世界のフィールド



### ユニバーサルシアターを高めてくれた:

森をイメージしたシアター内部。木の装飾の一部は吸音材の役割も果たしている（写真はすべて2018年に撮影）

## 日本で唯一の ユニバーサルシアター

いづみ なおこ  
飯泉 菜穂子

民博 人類基礎理論研究部

「障害の有無にかかわらず、映像文化をさまざまな人と共有したい」。そんな想いから筆者は昨年11月にみんぱく映画会「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」を実施した。上映会に先立ち、筆者は日本で唯一のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ（CINEMA Chupki TABATA）」に足を運ぶことにした。



上：音質にこだわったスピーカーは劇場の前面、側面、後面そして天井にも配置されている  
下：完全防音の親子鑑賞室

視覚障害者サポートから「ユニバーサルシアター」へ  
「シネマ・チュプキ・タバタ」は二〇二六年九月にオープンした。JR山手線と京浜東北線の田端駅から徒歩約五分の商店街のなかにある、日本で初めてのユニバーサルシアターである。運営母体は、二〇〇二年から音声ガイドによる視覚障害者の映画鑑賞サポートをいち早く手がけてきた「シテイ・ライツ」というボランティア団体。シテイ・ライツの名前は、盲目の花売り娘が登場するC・チャップリンの映画「街の灯（C.M.「Gone」）」に由来する。オープンに至る経緯を当シアターおよびシテイ・ライツ代表を務める平塚千穂子氏（ひらつかちほこ）にうかがったところ、長年の夢であった自分たちの自前の映画館を開館するにあたり、視覚障害者サポートのみならず、さまざまな視点を盛り込んだ「ユニバーサルな」鑑賞環境を目指そうということになったのだそうだ。  
「チュプキ」というのはアイヌ語で月や木漏れ日などの「自然の光」を意味する。なるほど、シアターは緑豊かな森をイメージする柔らかなで明るい色彩と装飾があふれる居心地の良い空間だ。出発点が視覚に障害をもつ人々へのサポート活動であっただけあって、音響へのこだわりは本格的だ。北欧製のスピーカーは、リアルなサウンドを再現できる最新の

音響設備である7.1ch Dolby Atmos/ DTS:Xに対応し

ている。じつは、森をイメージする装飾の一部は吸音材の役割も果たしているのだという。

## ユニバーサルな映画鑑賞環境とは

一般に、障害の有無にかかわらず何かを楽しんだり実現するよう目指すことを「バリアフリー化」「ユニバーサルデザイン(化)」などと称する。目指すところは同じでも、前者は現在の社会環境にはさまざまな障壁(バリア)があることを前提にそれを取り除くことを目指し、後者はさまざまな事柄のデザイン策定段階から障壁のない環境構築を目指すというニュアンスの違いがある。「シネマ・チュプキ・タバタ」が目指すところは後者である。

視覚に障害のある方に対応した音声ガイド(副音声、外国語映画の場合には字幕読み上げ音声も加わる)、邦画には聴覚に障害のある方の鑑賞を前提とした日本語字幕を常時付与した上映をおこなう。配慮の対象はいわゆる障害をもつ方だけではない。上映時間中に泣いてしまったりおしゃべりしたくなってしまうがちな赤ちゃんや小さな子どもをつれた方を対象とした完全防音の親子鑑賞室も用意されている。

「シネマ・チュプキ・タバタ」の料金表には障害者割引料金が載っていない。障害者サポートを実施しているシアターなのに何故?と一瞬不思議に思ったが、さまざまな障壁を取り除いた上映環境を前提としているシアターだからこそ、敢えて障害者割引を設定していないのだという説明を聞いて、いたく納得した。障害の有無のみを理由とした割引はおこなわない代わりに、移動に困難を伴うために同行援護サービス等を受けている方の介助者分のチケット代は請求しない(ヘルパーパス)、心身の障害がきっかけとなって結果的に就労困難・生活困窮という別の障壁に悩まされている方へは割引料金を設定する(ブライイド)といった対応をおこなっているという。

★  
日本、東京

## 我が町のミニシアター

動線の確保もユニバーサルな環境には欠かせない。ホームページの案内に従い、田端駅北口改札を出て映画館までの道のりをたどってみた。界隈の地形は比較的高低差があり坂道が多い印象があるが、現地までは駅に隣接するエレベーターを利用すると車いす利用者や移動に困難を抱える人でもアクセスが容易であり、途中で「だれでもトイレ」を利用することも可能だ。映画館開設にこの地を選んだ理由はその辺にもあるのだろうか?と尋ねてみると、思いがけない答えが返ってきた。候補地になった段階で「もちろん、最寄り駅からのアクセスのしやすさや映画館の建築・防火基準を満たしていることも重要な要素でした。でも、じつはいろいろ調べてみたら、この辺りは映画館不毛地帯だということがわかって。それも、この地を選んだ理由のひとつです」と。

音響へのこだわりにしても候補地選定理由にしても、障害のある方たちのために貢献するという福祉的な視点のみならず、「良い映画を気持ちの良い環境で映画を愛するいろいろな人たちと一緒に観たい」という、本格的なミニシアターとしての気概があるシアターだ。一映画好きとしても、それがとても頼もしく嬉しい。この新しいチャレンジが継続することを心から応援したいと思う。



上：映画の音を震動で感じられる「抱っこスピーカー」を希望者に貸し出している  
下：全席に搭載されたイヤホンジャックには、左右の音のボリュームを調節できるレバーがある

月刊

2019

2  
月号

# みんぱく

特集

## 南アジア、 弦の響き



遥かなる弦楽器の旅 寺田吉孝  
インドの弦楽器サロードとの出会い 田森雅一  
インドネシアのルバップ 福岡正太  
シタールを日本で使うということ 小日向英俊  
イランの弦楽器 サントウル 谷正人  
トルコでサズを奏でる日々 米山知子  
南インドのゴットウヴァーティヤム 寺田吉孝